

『寝言家族』

脚本 遠藤雄史

【登場人物】

田口良彦（二八）	盛岡市にある老松铸造の製造担当
安藤海翔（一九）	老松铸造の製造担当
原幹夫（三九）	老松铸造の製造部主任
白鳥鷹造（五一）	老松铸造の製造担当
小原千晶（四二）	老松铸造の総務担当
菊池涼子（三〇）	老松铸造の品質管理担当
松本和佳子（二十四）	老松铸造の営業担当
田口純也（四一）	良彦の父親（幽霊）・阪神淡路大震災で被災し死亡
田口花江（四〇）	良彦の母親（幽霊）・阪神淡路大震災で被災し死亡
田口美鈴（一八）	良彦の姉（幽霊）・阪神淡路大震災で被災し死亡

幕が開く前――

青い幻燈の世界――

舞台中央に炬燵――

炬燵の上にはいくつかの折鶴と折り紙

炬燵の周りには座布団――

舞台奥には二階へと続く階段――

舞台下手奥にはソファ――

そこにリュックを背負い、作業着に身を包んだ田口良彦が現れる――

良彦はどこか疲れ切った表情をしている――

遠くで風が鳴る――

良彦はリュックをソファへ近くに置き、炬燵に入る――

そして、折鶴を黙々と折り始める――

しばらくすると突如、地鳴りが聞こえてくる――

――地震――

良彦は鶴を折るのをやめ、息をひそめる――

良彦は大きくなる――

良彦はゆっくりと立ち上がる――

良彦は天井をみつめる――

2 | トラブルカフェシアター
第20回公演『寝言家族』

暗闇が部屋を包み込む

幕が開く

田口良彦の夢の中
十六年前の田口家（一九九五年一月十六日の夜）

良彦は寝ている
その様子を見ている父、純也と母、花江。
炬燵の周りには影たち
影たちの服装は黒い山高帽に外套。その姿は宮沢賢治のようでもある。

影1 アンパンマン：
影2 アンパンマン：
影3 アンパンマン：
影4 アンパンマン：
影5 アンパンマン：
影6 アンパンマン：
影7 アンパンマン：
純也 これ：
純也 アンパンマン：
純也 アンパンマン：
純也 そうか：

良彦と影たちは突然体を起こし—
良彦・影たち もうキビダンゴは食べません！
純也 !?

また、寝に入る良彦と影たち。

良彦 もう食べれないよ
純也 どきんちゃんにあげてよ
良江 それオフサイド
影7 しんばん！
影6 あんぱん！
影5 フィールフィール
影4 キビダンゴは友だちさ
影3 アンパン：（ンチ）
影2 ー最後まで言えよ。
影1 寝言ですかから。
純也 花江 いろいろ混ざつてるな。

美鈴 純也 寝れないと面白いぞ。
花江 （無視して）何で部屋で寝ないの？
良彦 一何でかしらね。
美鈴 良彦と影たち 一（大爆笑）
良彦 それはクラムボン！
花江 美鈴 一ちよつー
花江 お姉ちゃん。
美鈴 一。あたし、明日早いんだけど。
純也 ああ、自己採点か。
美鈴 そ。
美鈴 純也 大丈夫なんだろ？
美鈴 もちゞーお父さんより早く叶えるから。
純也 そうかそうか。
花江 ほつといて寝なさい。
美鈴 わかった。

良彦と影たちは「来ないでくたさい」「あつち行つてくたさい」と叫いてゐる。その様子をあきれた様子で見てゐる姉の美鈴。

影7が外套と山高帽を取る
すると影7は、良彦の姉、美鈴と
美鈴は純也たちの方へ駆け寄る。

良彦	花江	相変わらず賑やかな夢ね。
影1	え？ 痛い痛い！ 頭むしるのやめなよ・	ーあ！ 痛がるならやめればいいのに・
影2	え？ くれるの？	
影3	無理無理！	
影4	アンパンのあんこはさ：脳みそでしょ？	
影5	臭そう：	
影6	かがない！ かがない！	
影7	ー！？ やめてやめて！ 押し付けてこち	
皆	先生、いちいちこつち来ないでください。	

4 | トラブルカフェシアター
第20回公演『寝言家族』

美鈴は階段を上ろうとすると――

良彦 上はだめだ！

美鈴は驚いて止まる。

影たち 本当にあなたほしいものはなんですか？

影たちはゆっくりと立ち上がる。

美鈴 なに？ ホントわけわかんない夢みてるんだから。

良彦 落ちる――

美鈴 なに、その不安な寝言！ 失礼しちやう！

美鈴は気にせず階段を上がっていく。

影1 ぼくはロックスターになりたい

良彦 だめなんだつて：

純也 どんな夢を見るんだろうな。

花江 どんな夢なんでしょう。

影2 私は翻訳家になりたかった

花江 ――この子はあなたや美鈴と違つて寝てる時の夢が鮮やかですから。

影3 私は童話作家になりかつた――（立ち上がる）

影4 私はパティシェー（立ち上がる）

影5 私は売れて裕福に――

影6 私はみなが幸せに――

花江 今日は上がれないのね。

純也 ん？

花江 なんでもありません。

良彦 一母さん：

花江 呼んでるぞ。

純也 寝言ですよ。

純也 そうか。

遠くで銀色の汽笛が聞こえる。
その汽笛が聞こえているかのような二人。
影たちはめいめいに「銀河ステーション」と小さく呟く

5 | トラブルカフェシアター
第20回公演『寝言家族』

花江 さ、私たちも寝ましょう。
純也 明日、早いのか？
花江 ええ。
純也 一すまないな…
花江 一めずらしい。
純也 美鈴が合格したとなると、かかるだろ。
花江 それはね。

花江 また汽笛が鳴る。

純也 なあー

影たち （めいめいに舞台上を速足で歩きまわりながら）銀河ステーション！ 銀河ステーション！

花江 私の夢でもあるんだから。—寝ましょう。

良彦 寝ちゃダメだよ：夢が見られなくなる：

純也 おかしなこと言うやつだ。

花江 明日の朝、素直に学校に行けるといいけど…

純也 （不思議そうに花江を見る）

花江 ほら。

純也 ああ：

花江 純也と花江は部屋を出て行こうとする—

良彦 （不意に立ち上がり）父さん！

純也 おやすみ。

良彦 母さん！

花江 良彦が良い夢を見られますように：

良彦 二人は部屋から出ていく。

花江 部屋の外から影たちの声が聞こえる

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか？」

良彦 …俺は…

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか！？」

良彦 僕なんかが…

6 | トラブルカフェシアター
第20回公演『寝言家族』

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか！！？」

良彦 どうしてー

影たち 「ほんとうにあなたのほしいものはなんですか！！？？」

良彦 どうして俺だけ：

良彦は呆然と立ち尽くす。
そして、暗闇が部屋を包む。

二〇一一年三月一日。生松鑄造休憩室。

暗闇から声が聞こえてくる。

小原 ちよつと、そこの角はしつかり合わせなくちや。

松本 ։。
小原 和佳ちゃん。

松本 はい。

小原 あなたに言つてるの。

松本 あ：すみません：

小原 和佳ちゃん、見かけによらずあれね。

松本 ー？ なんですか？

小原 ええ？ だからーあれはあ！ あれでえ！

田口良彦が夢から覚める。

部屋の様子が見えてくる。

炬燵に座つているのは、良彦の同僚の小原、松本、菊池。

三人とも折鶴を折っている。

炬燵の上には折り紙と折られた鶴。

壁には二〇一一年三月のカレンダー。

良彦は休憩室のソファで寝ていたようだ。

良彦には毛布がかけられている。

小原 あれよお…
え？

小原 (自分の額を指さし) ここまで来てる！

松本 え？ 不器用。

菊池 小原 おでこだともう通り越してくるから。

菊池 小原 通り越す？ どこを？

菊池 小原 あ、これやり直し。

8 | トラブルカフェシアター
第20回公演『寝言家族』

菊池 名前なんか、下請けの下請けには関係ないけど。
小原 （もう一度ダメボックス内にある自分の鶴を取り）：涼子ちゃん。——あ
たし、製造じやない。

菊池 できる。

小原 ：ぐつちい。お願ひい。

菊池 休んでなつて。

小原 お願ひい！

良彦 ：はい。

菊池 やつた♪

菊池は折り紙を良彦に渡す。

良彦は炬燵には入ろうとせずに、空いている床で折ろうとする

小原 またそうやって！ ほら、ぬぐだまつて（温まつて）！

菊池は良彦を強引に炬燵に入れる。

良彦と松本、菊池は鶴を折り始める。

小原はその様子と完成した折鶴の数を見ながら——

小原 —（段ボールに入っている折鶴を見て）頂はまだ遠い：

松本 ですね：安藤くん、いつでしたつけ？

小原 三月いっぱいだけど、有給消化分があるから、来週の金曜日まで。

松本 十一日ですか。

小原 新たな旅立ち。本願成就を願つて鶴を編むつーてか。

菊池 アクア、プリウスよりも燃費良いって話だけど、できんの？ 3じやなく
て5ナンバーって話つしよ。総重量、二百ぐらい軽くなるわけだから。

小原 それで、ウチの部品も軽量化目指してるんでしょ。

菊池 それにしたつて、根詰めさせすぎ！ —（良彦に）しょつ！？

良彦 ：大きなところは白鳥さんが考えてくれてますから。

小原 雁さんとぐつちいなら、少しごらいの軽量化、大丈夫よね。管理部は
出来上がつたものだけ、検査してればいいのお！

菊池 （小原を睨む）

小原 （素知らぬ顔で鶴を折つて）

松本 親からの通達だとリツター40目指すつて話です。

菊池 はあん？ どんなエンジンよ？

小原 鉄の塊が空を飛ぶ時代だからね。

菊池 —（飛行機関係ないつしよ）

小原 涼子ちゃん、そんなに角立てないの。まだ乾燥してんだし、♪お肌お肌
の曲がり角♪

9 | トラブルカフェシアター
第20回公演『寝言家族』

小原 ♪曲♪がろうか 曲がろうよ♪♪

菊池は無言で小原が持つている折鶴を握り潰す。

小原 ああああ！？

菊池 プリウスよりも燃費良くて、それで小型つてさー

小原 涼子ちゃん：

菊池 （折鶴を投げ捨て）自業自得。

小原 （折鶴を拾い上げ）あああ…。

菊池 親は、んな寝言みたいなこと言うだけでいいけど、あたしら下々がどんだけ大変かつてわかんないんだよ。

小原 （撫でながら）あああ！

菊池 ；はい。（自分の折つていた鶴を渡す）

小原 涼子ちゃん。

菊池 ；（鶴をまじまじと見て）一上手ね。

菊池 実際どんだけ軽くすんの？

菊池 5キロです。

菊池 5！？

菊池 （良彦を見る）

良彦 トランスクスカル全体では8なんですが、生松铸造で作る部品はは5キロです。

小原 それは：かなりね。

菊池 信じらんない：下請けの下請けだと思って、いつでも切つてやるつていう魂胆しょ。

小原 切る！？ ぐつちい、お願ひ！ ウチの子、四月から高校なの。まだ、辞められない。

松本 高校入試終わつたんですか？

菊池 三月九日だから、来週。受かるつて言つてるんだけど、どうなんだか：。

小原 ドキドキですね。

松本 そうなの！

菊池 で、どうなの？

松本 アクアは金ヶ崎で作るの確定らしいです。

菊池 試作品はできたんで、とりあえず今朝、金ヶ崎に出しました。

小原 金ヶ崎？

松本 関東自動車でやるんだ。

松本 はい。

菊池 部品はオール岩手、オール東北？ つて感じ？

小原 そこまでは：

松本 検査してないけど。

菊池 良彦 原さんが。
へ～。

朝からいなのはそれで。今日、何するか決めるつて言つてたのにね。
そうでしたね。

(不思議そうな顔で小原たちを見る)
松本 良彦 安藤君の送別会でする余興。

それもさー余興つて、別にいいつしょ。
いいじやない。

菊池 小原 安藤抜けて、ライン回るの？

小原 一応、求人は出してる。

菊池 小原 どうせ、来てないつしょ？

小原 小原 早い時期から出してるけどね～。いいじやない、夢を追い求めて、仕事

菊池 小原 辞めるつて。ねえ、ぐつちい！

小原 小原 ぐつちいはどうなの？ 何か夢はあるの？

菊池 小原 飽きた～！

小原 小原 ちよつと！
菊池 小原 これ、千羽作んなくていいんじやない。

菊池 小原 ダメよ！ 千羽鶴なんだから！

菊池 小原 だいたい、千羽鶴つて～

菊池 小原 涼子ちゃんはそうやつて文句が多いの。
別に、祝いたくないつてわけじやないよ。一でもさ、他にあるつしょ。

菊池 小原 夢を叶えて的なグッズ？ ミサンガとか？

菊池 小原 軽い、軽くて小さい。

菊池 小原 大きい方が気持ちがこもつて見えるでしょ。一だいたいね、言わせても

らえ～ば、各々家で折つてこようつて言つたけど、全然だつたでしょ。一だか

ら、こうして昼休みを使つてやつてるわけ。本人に見つかるかも知れないと

リスクを負いながらも、こう、折つてるわけよ。

菊池 小原 家に帰つたら無理つしょ。酒飲んで寝るもん。一つか、ここで折る？ 入

つてくるつしょ。

小原 安藤 の！ その辺は抜かりありません。「安藤入室禁ず！」つて張り紙貼つてあるも

安藤 良彦さん！
安藤が入つてくる。

小原 安藤 良彦 安藤！？
え： (小原に) ちーすつ！ (良彦に) 原さんと雁さん、呼んでまつす。

安藤 何してるんすか？ 鶴？ みんなで鶴折つてんすか？

小原 あ：うん。そうね、これは鶴。立派な折鶴。

安藤 折り紙つて：小学校以来？ あ、それ代わります。

良彦 悪い。

安藤 なんか、急ぎみたいっすよ。初号機のことじやないっすか？

小原 初号機？

安藤 エヴァ風に言うと的な。（笑う）

良彦は休憩室を出ていく。

安藤は周りに気にせず、炬燵の中に足を入れて

安藤 あつたけ～。なんか、入口に「安藤入室禁ず！」って入つてこい的な振りがあつたんすけど、あれなんすか？

小原 そつちね～。

安藤 安藤入室禁ず！ 週、息子さん高校入試じやないすか？ 大丈夫すか？

小原 うん：大丈夫。

安藤 安藤（笑う）やべつ！ これつて…どう折るんでしたつけ？（松本の鶴を覗き込み）あ、こうだ：こう。—和佳子さん、手つき超いいっすね！

松本 —ありがとう。

小原たちは気まずい雰囲気。

四人、少しの間黙々と折る。

安藤は飽きたのか、不意に立ち上がる。

安藤は松本、菊池、小原を見る。

三人 …。

安藤 …。

安藤はカレンダーを見に行き、

安藤 あと十日か：

安藤（さつきよりも大きな声で）あと十日か～。

三人 …。

安藤 ちよつと、何すか、この静かな雰囲気！？ いづくねつすか？ いづいっすよね？ え～、俺、もう少しでお別れだから、みんなと話したいつす。

三人 安藤 ・・・。

安藤 ・・・。つか、何で鶴折ってんすか？ おかしくねっすか？ え？ ま

じ、集中してんすね？ あ、あ、あ！ ピンと来た！ ピンと来た！ これ、原さん得意のライン効率化のためのアイディアすよね？ こう、休憩時間に鶴折って、集中力？ —コンセントレーション？ 高めましょ的な。

三人 安藤 ・・・。

正解すか？

三人 安藤 違うんすか？

三人 安藤 ・・・。

安藤 え？ 鶴つすよ。良いオトナが休憩時間使つて鶴つすよ。バカみたいじやないすか？ あ、みんなのことを言つてるんじやないんすよ（笑う）

—原さん、発信は合つてるんすよ—合つてるんす。—原さ：あ、ピンと来た、これ来た！ これ、千羽鶴すよね！ 願掛け的な！ これ、きっと、ニュージーランドに。

小原 ーん？

安藤 ニュージーランド。知りません？

安藤はオールブラックスのハカの真似をしてみせる。

小原 （腕をつかんで）しなくていいから。
安藤 うす。

小原 どうしてニュージーランド？

安藤 先週地震遭つたじゃないですか。

小原 ーうん。ーあれ、先週か。

安藤 そうすつよ。だめつすよ、忘れちゃ。日本人、すぐ忘れんす。俺、忙しうぎるのがよくないと思つてんすよ。日本つてリサイクル早いじや—（笑う）

リサイクルじやないつす、サイクル早いじや—

小原 うんうんうん。それは、分かつた。それでね—

安藤 どうしてつてことすよね？だから、復興祈願、的な。俺ら、なんもできないけど、なんか心は繋がつてゐる的な。俺ら作つてる製品の原料、お隣のオーストラリアから輸入してゐるし、そんな遠くないつうか。ほら、日本の留学生もたくさん亡くなつたし。

小原 安藤：あんた良い奴なんだよね。

安藤 え？ なんすか？ 別に良い奴じやねつすよ。高校からタバコ吸つてた

小原 うんうんうん、それはいい。

安藤 しー あしたたちね、いろんな理由があつて、鶴折つてんの。

小原 ニュージーランドじやないんすか？

休憩室では安藤が嬉しそうに折鶴を一つポケットに入れて、部屋を出ていく。

原 田口君さ、こつちにご家族いるっけ？

良彦 いいえ。

原 あ、いや、そういうことじやなくてね。親戚とか：すまんね。ちょっとデリカシーなかつたな。一大丈夫、最近、地震のニュース多いけどーほらニュージーランドの。

良彦 ・・・。

原 あ、すまん。

良彦 いえ。あの、試作品、だめだつたんですか？

原 いや、すこぶる良い。好感触。ま、あれで決まりかな。

良彦 そうですか。

原 いや、雁さんと田口君が頑張つてくれたおかげだよ。疲れたろ？ 疲れた

よな？ 先週からずっと、ここに詰めっぱなしになだつたんだつて？

良彦 大丈夫です。—それで、話つて？

休憩室では、あるはずのない階段から良彦の母親、花江が降りてくる。
その階段は十六年前の震災で倒壊した田口家の階段なのだろう。
花江は炬燵に入り、黙々と鶴を折り始める。

原 良い話しなんだよ！ すこぶる良い話し！ 金ヶ崎の工場に本社からも役員来ていてさ、緊張したんだけどねー私の話しあいいか。それで、試作品の出来が想像以上だつたようで、びっくりしてたよ！

良彦 そうですか。

原 ここからが本題。—田口君さ、本社行かない？

良彦 一え？

原 愛知県。一本社の開発チーム専属の技術者でどうかつて！ びっくりした？ びっくりしたよね？ 抜擢も抜擢、大抜擢だから！

良彦 白鳥さんじや？

原 雁さんとも話し合つたんだけど、君だろつて。

良彦 (白鳥を見る)

原 だから、最初にご家族の話を。確か、お祖母さんは：

良彦 3年前に。

原 丁度良いつてわけじやないんだけど、君をしばるものは何もないんだし、

どう？

小原 (声) ここかな？

菊池 (声) そうじやない？

松本 (声) 応接室に入つたつて。

原 ?

扉をノックする音。

原 はい！

小原 失礼します。——いた。原くくん、大変なことに。

原 え？

小原 鶴折つてゐるの、安藤にばれた。

原 ばれた？

小原 しかも、自分で自分の鶴折つてゐる。

原 どうして？

小原 とりあえず、ちょっと来て。（出て行く）

原 —悪い話じやないから考えておいて。——（小原に） 分かり易く説明してくれる？

原は応接室から出ていく。

良彦 白鳥さんじやないんですか？

白鳥 私じやないですよ。

良彦 だつて——

白鳥 本社が求めているのは、技術者——職人です。

良彦 だつたら。

白鳥 私はセールスマンです。

良彦 ；。

白鳥 良い話だと思いますよ。——おめでとう。

白鳥は応接室を出していく。

一人応接室に残る良彦。

そこに、亡くなつたはずの父と姉が休憩室に現れてクラッカーを鳴らす——

純也 やつたな良彦！

美鈴 愛知でしょ！ 美味しいモンつて言つたら、味噌カツ、煮込みうどん、

手羽先、天むす：ひつまぶし！ あ、あたし、ウナギはダメだ。——ウナギは

父さんにあげるね！

純也 ウナギかあ：何年も食べてないな。最後に食べたのいつだ？

花江 いつだつたかしらね。

純也 うなぎ嫌い！ それよりハム！

美鈴 良いモン食べさせてないから、貧乏舌になつちまつてな。

天井 でも、たれは好き！ ごはんにたれで三杯はいけるな！ あ！ あたし、

天井 つて天かすしかのつてないと思つてたからバカにされたんだからね！

純也 すまん！ これも父の体たらくぶりが原因よ！ 一どこで本物を知つた？

美鈴 高校。チーちゃんがー

純也 ちーちゃん？

美鈴 友達。ちーちゃん、天丼、弁当に持つてきたん。

純也 天丼を弁当に！？ 神戸の高校生つつうのは、なんつうだらうな…感じ悪いなー！

美鈴 悪いなー！

美鈴 それで、ウチー

純也 そのエセ関西弁やめい！

美鈴 神戸弁です！

純也 美鈴 ぐぬぬぬ：！

美鈴 お母さんにお願いしたんよ！ エビがーまあまあおつきかつたあ！

純也 美鈴 まさに、俺も食べたかった！

花江 純也 美鈴 美味しかったあー！ エビがーまあまあおつきかつたあ！

純也 美鈴 お母さんにお願いしたんよ！ エビがーまあまあおつきかつたあ！

純也 美鈴 いいから出せ！

純也 美鈴 いいから出せ！

純也 美鈴 ちよっと！ やめてよ！

父と娘の楽しげな鬼ごっこが始まる。

良彦 うるさーい！

純也と美鈴は静止する。

純也 夜中で誰も居ないとはいえ、ここ工場だから。

純也 純也・美鈴 すみません。

良彦 ；まだ居たの？

純也・美鈴 え？

良彦 まだ居たの？

純也 居たよ。ーなあ。

美鈴 うん、居た。ーでも、久しぶり？

ああ、そうだな。ーいつだつた出たの？

バレンタインデー！

——良彦が初めてチヨコ貰つた——

と、本人は申しておりますが、まあまあ。
はいはいはい。
で、誰だつけ？

おしとやかなー

ワ力ちゃん。
（手元）

綱也・美鈴（手を叩きながら）りがせやん！
美鈴 あれだつて、ホントはウハウハなくせして、「俺、そういうのいいから」とか言つてさ。一付き合いたいくせに。一中学生か！？

どうにもなつてない。

みんなにあげた中の一つだから。——そういうの関係ないし。

それはいいから。——なんで居るの？
え？ 言つてるだろ！ お前を応援に来たんだって！
なあ！

こら！ そういうことを言うんじやありません！ 美鈴も鶴折りましょ。

美鈴（しぶしぶ）はい。
純也
父さんも折る。

美鈴と純也も炬燼に入つて鶴を折り始める。

良彦 それ、安藤の千羽鶴だよ。
純也 講わん講わん。

美鈴 安藤つて、ロツクスター夢見て仕事辞める子でしょ。——ホントはさ、あ
ら、うこを見習つてほんのぞけだ。うこがやさしく見てて、事の一

つや二つ追いたくなるんじやないの？ 宮沢賢治のような全世界で翻訳される童話を書くことを目ざした——無職の父。

純也 大変苦労をかけました。
美鈴 第二の戸田奈津子！いや、全ての映画のクレジットには「田口美鈴」とあたしの名前が出るような翻訳家を目指した偉大な姉。とんびが鷹を生むを体現したかのような存在！

25

始
ま
つ
た

なんだよ？

良慶の文集

开心な時こなるニウジウジウ

他こやりたハ二事あるのか?

あるわけないでしょ

良彦。

備じやないと思ふ

村上が次々、この甘櫻(やなぎ)をもつ。

それじゃ、誰だ？

雁さん・白鳥さんたよ

人がいなかつたらできなかつたし——俺よりもできるし——主任だつてわからぬ。二目ふりは准三しごつ。

泊まり込んでまで試作品と向き合っていたのはお前だろ。お前が開発し

武作品のきめこ白まり

ん
?

それに、今、俺が抜けると大変なんだ。安藤が抜けて、俺まで抜けると
ノがまわらなくなる。「試作品二〇〇Kが出たところからが亡しくなるん

みんないいよ。

（）の人ががんばるといふのが、

カタカナ

だつて |

は階段をのぼつて上へ行く。

良彦。お前、これ（作文を見せる）

良彦 純也 花江
純也 一もうちよつと考へてみる。一母さん、一服してくる。
花江 どうぞ。

純也は作文をリュックへと戻し、休憩室の入り口ではないところから消えていく。

良彦 花江 良彦 花江 良彦 花江 良彦 花江
花江 一緒に折る？
良彦 うん。
花江 これ、安藤君に？
良彦 うん。
花江 そう。
良彦 うん。一母さん、明日も居る？
花江 居ますよ。
良彦 うん。

暗闇が部屋を包む。

二〇一一年三月四日金曜日。夜。休憩室。
良彦が入ってきて、あたりを見回す。
そこに花江が階段から下りてきて――

花江 おかえりなさい。
良彦 一ただいま。::。
花江 遅くまでごくろうさま。お腹空いたでしょ。一リンゴでも食べる？

美鈴が階段から下りてきて

美鈴 良彦 美鈴 良彦 美鈴 花江 美鈴
お母さん！甘やかしちや、いかん！
(迷惑そうに)なに?
なにだあ？こいつ、ちつとも反省しとらん！
反省つて一何を？
けつの穴から手突っ込んで奥歯――
花江は？
美鈴は？
美鈴 いる！

花江は一度、休憩室から出でていく。

美鈴は良彦の向かいに乱暴に座り、良彦を睨みつける。

松本 そんなことないですよ！

良彦 見てたのかよ？

松本 いやでも目に付くわ！ あんた、俺が抜けるとどうとかって言つてい
たけどさー

小原 若いんだから、チャレンジ！ 送別会盛大にするから！ また、鶴折ら
なきやう！（消える）

菊池 一ラインの心配なんかしなくていいって。雁さんいるっしょ。あたしも入
れるし。さ、仕事仕事。（消える）

松本 寂しいですけどーあ、安藤君と田口さんが一気に抜けるとつてことです
けどーでも、仕方ないです：応援します！

松本は行こうとするが、立ち止まりー

松本 ーもしよかつたら行く前にご飯でも、ーいえ、あの、と、友だちが美味
しいって言つてるお店があつー

美鈴 :

松本 忙しいですよね！ ごめんさない！

松本はかけていく。

美鈴 もつたいない！ 明らかにー明らかでしょ！

良彦 違うよ。一人で行き辛いからー

美鈴 あんた、どういう思考回路してんの？ ー（花江に）脳みそくさつとる。
ー後ろ向きにもほどがある！

良彦 普通だよ。姉ちゃんの方がおかしいんだ。

美鈴 小学校の頃からなんも変わつとらんね。安藤つて子、見做い！

安藤 疲れたらお疲れ様っす。

安藤が休憩室に入つてくる。

美鈴はその様子をソファに腰掛けてみている。
花江は黙々と鶴を折つてゐる。

良彦 お疲れ。

安藤 （鶴折つているのを見つけて）あぎつすーつか、いいすよ。良彦さん、
初号機で疲れてるじやないっすか。つか、まだ改良してんすよね？

良彦 ちよつと強度がさ。

安藤 僕も折るつす。

良彦 いいつて。

安藤 僕のじやないっす。ー良彦さんのつす。本社から声かかつてゐつて。す
げえつす。ぱねつす。ー俺も負けてらんないっすわ！（笑う）

良彦 く振り！ 残像拳！ （笑う）
安藤 大丈夫つすー間に合うつす。あと、一週間しかいないつすけど、超Bダ
ツシユで折るつすから。神速つすよ、俺。残像みせちやうつす。（折り紙を早

良彦 そうじやなくてさー

安藤 ツツコミ！ 良彦さんのツツコミ！ 超レア！ 辞める直前にいいの貰
つたす。あざーす！（笑う）んで、なんすか？

良彦 俺の鶴はいらないよ。

良彦 なんですか？

良彦 行かないから。

良彦 は？ 行かないんすか？

良彦 行かない。

良彦 ぶるつてんすか？ 大丈夫つすよ！ 良彦さんの腕、確かつすから！

良彦 丨安藤さ、夢追つてどうすんの？

安藤 ビックになるんす。永ちゃんみたく、偉大なロックスターになるんす。

俺のソウルフルな歌で、武道館いっぱいにするんす。丨あ、夢じやなくて目
標つす。だつて、夢は見るもんで、目標は達成するもんじやないすか。これ、

人の受け売りつすけど。

良彦 だつたら、なんで就職したんだよ。

安藤 あー、そうすよね。俺、正直ぶるつてたつす。無理だろうなつて思つて
たつすーかつこ悪いけど。だから、就職したつす。丨去年の夏、先輩が事故
で死んだんすよ。丨通夜で、死に水つていうんすか？あれ、やつてるとき
に、なんか、無性に怖くなつて：信二さん、あ、その先輩なんすけど、先生
になる気してて、岩大に行つてたつて聞いて。丨なんか、俺、このまま死に
たくねえつて。人生一度きりじやないすか。丨良彦さんもなんか、夢ー夢つ
て言つちやつた（笑う）目標あるんすか？だから、行かねえんすか？

良彦 ーないよ。

安藤 だつたら。

良彦 安藤さ、似てんだよ。

安藤 へ？

良彦 家族に。丨みんな夢見てた。父は童話作家ー宮沢賢治みたいに世界で翻

訳されて、世界の子どもたちに読んでもらうんだつて言つてた。姉は翻訳家。
母は、二人の夢が叶うこと願つて鶴を折つてた。

良彦 しひれるファミリーつすね！ 今、どうなつてるんすか？

安藤 死んだ。え？ 十六年前、死んだ。

良彦 事故かなんかすか？

良彦 地震。母の仕事の関係で神戸にいてさ。

安藤 | なんて言つていいんすかね：

良彦 なんか言つてもらいたいわけじやないからさ。

安藤 でも、でも、でも、なおさら、良彦さん、なんかないんすか？

安藤 さん、助かつたわけつすよね？

良彦 …。

安藤 やつぱり本社行き、チャンスじやないすか！ 死くなつた家族の分、が

良彦 んばる的な！

良彦 …。

原 田口君！

原が血相変えて入つてくる。

安藤 おつかれっー

原 ね、ね、ね、どういうこと？

安藤 何がつすか？

白鳥が入つてくる。

原 どういうこと？ どういうーちょっと雁さんも入つてきて！

安藤 本社行かないつてどういうこと？ なんで？ なんで？ なんで？

原 で、自分で勝手に本社に電話しちやつたの？

安藤 まじっすか？

原 びっくりしてたよー！ びっくりしてた！ 私もびっくりした！

良彦 すみません。

原 謝つてすむ問題じやないよ、うん、すまない。あのね、社会人でしょ？ ま

ず、上を通すつてのは筋なわーいや、筋論を言いたいわけじやなくてね、こ

のなんつうだらう、なんつうだらうね、雁さん！

白鳥 はあ：

原 雁さんからもなんか言つてやつて、ガンつて。

安藤 ちよつ、主任、洒落すか？

原 (ものすごい剣幕で) 洒落じやないよ！

安藤 すんません：あ、俺、コーヒー買つてこようかな…

安藤は逃げるよう休憩室を出ていく。

原 あのさ、田口君、何か問題あるの？ あるなら言つてよ。私のメンツつてのもあるんだあ。君がいきなり本社に電話するのと、私が電話するのとでは違うわけ。違うんだあ、これが。ー私としては、行つて欲しい。本社とのパイプが確立するのは、願つたりかなつたり。もちろん、田口君の気持ちつて

のは尊重するよ。尊重する。でもね、こんな良い話つてのは、ないわけ。盛岡みたいな地方に居て、本社から声がかかるつてのは、宝くじに当たるようなもんなわけ。ウチは、もともと鉄器作つてて、雁さんとか頑張つてくれてたけど、伝統とか良い物をとか、時代に合わなくなつてきていて、私が、部品製造にシフトさせたわけ。苦しいけど、何とか軌道に乗つてきたときに、田口君の引き抜き。渡りに船つてのことなんですよ。—田口君が断つたことは、私が頭を下げて、なかつたことにしています。

良彦え？

原どうしても行けない理由つてある？ ある？

良彦…。

原（咳払い）何も人身御供として行つてくれつて言つてるわけじゃないんです。—君にとつても、工場にとつても、ひいては、日本の自動車界にとつても良いことなんです。このことを考えて、もう一度、冷静に考えてみて欲しい。

そこに松本が入つてくる。様子がおかしいことに気づき、戸惑うがー。

松本あのー

原なに？

松本関東自動車からお電話です。

原分かった。—雁さんからも言つてやつて。ガシつて。

原が出ていく。

松本（良彦を見ている）…。

白鳥大丈夫ですよ。

松本：はい…。

松本が出ていく。

白鳥（折鶴を一つとり）私、みなさんに任せっぱなしにしてました。

良彦すみません…。

白鳥どうかしたんですか？

良彦…。

美鈴謝つてばっかりで、かつこ悪い。

良彦俺にそんな価値はありません。

白鳥（静かに笑いながら）人身御供。ま、言葉としてはなんですが—主任

が言つていたことは言つていたこととして、君が誠実に仕事と向き合つていた結果です。胸を張つていいと思います。
良彦でも雁さんの方が。

美鈴 あんたはいつも煮え切らん。雁さんだつて、あんたのことを認めてくれてるのに。

白鳥 言ったでしょ。私はセールスマンだと。私は良い物を一作り手として、自分が目指すものを作るのはやめたんです。鉄器をやめたのときに、職人としての私は死にました。部品なんか、誰からも見えない—そんな物に魂はこめられない—つて。しかし、君は違う。君は没頭している。一生懸命生きている。君は行く価値がある人間です。

良彦 :

白鳥 もう少し、考えてみてください。

白鳥が休憩室を出ていこうとする。
美鈴は良彦の前に立ち、白鳥に話しかける。

美鈴 一生懸命生きていますか？

白鳥 ?

(美鈴を見る)

美鈴 (良彦を見て) ねえ、どんなつもりで聞いたの？ 意味わかんないんだけど。(白鳥に) —俺—

美鈴・良彦 一生懸命生きているように見えますか？

白鳥 —私はそう感じています。

良彦 一生懸命生きるってなんですか？

白鳥 :

白鳥が休憩室を出ていく。

白鳥

良彦 —一生懸命生きなくちやいけないんですか？
(静かに笑う) 今の私には難しい質問だよ。

白鳥

花江 良彦は炬燵の上に乗っている折鶴を見ている。
花江はいつの間にか鶴を折るのをやめている。

白鳥

美鈴 がつかりだよ：ホントがつかり。お母さん、それでも良彦を応援しなくちやいけないの？

花江 :

美鈴 —あたしさ、神戸に引っ越しつて聞いたとき、本当に嬉しかったん。こんな田舎じやなくて、都会に住めるんだつて。新しい街、新しい友達、新しい生活が待つてたつて。あたしらが住んだのは、駅の近くだけど、三宮からは離れていたし、シャツターブル多かったたじやない。それでも、外国人多くて—ああ、この人たちと話せたら面白いんだろうなつて：。漠然と思つていた夢がはつきりした。翻訳家になるつて、言えるようになつた。お父さんは相変わらず全く売れないから、ずっと苦しい生活だつたけどあたしの未来が拓けたつて感じた。—あたしさ、一生懸命勉強したんよ。私大は無理だし、

浪人も無理だし、現役で合格しなくちやつて思つていたから。セントー、手ごたえはつちり！学校で自己採点するの待ち遠しかつた！でも：あたしの夢はある日に終わつた。突然、何の前触れもなく終わつた…。一九九五年一月十七日午前五時四十六分五十二秒。激しく揺れたと思つた瞬間：参考書がつまつた本棚に押しつぶされた。そして、あたしの部屋が下で寝ているお父さんとお母さんを押しつぶした…。—良彦、「一生懸命生きなくちやいけないんですか」ってどういうこと？

花江 美鈴。

花江 美鈴 ねえ、どういうこと？

花江 美鈴 教えてよ！

花江 美鈴 ……。

花江 美鈴 ……。

花江 美鈴 なんで、あたしやお父さん、お母さんが…：

花江 美鈴 なんで、あんたなの？—夢をもつことができなくたつていいけど…一生懸命生きないんだつたら、あんたの命、あたしによこせ！

花江 美鈴 美鈴！

花江 美鈴 だつて！ だつてそうでしょ…悔しい…悔しいよ…

花江 美鈴 …ごめん：

花江 美鈴 謝るぐらいだつたら…！

美鈴はリンゴの入つている皿をもつて乱暴に二階に上がつていく。
静寂。

花江 リンゴ、また剥いてこようか？

花江 いい。

花江 母さん。

花江 ん？

花江 どうして俺なのかな…どうして残つたの俺なのかな…

花江 寂しかつたわね。—ごめんね。

花江 謝らないでくれよ。

花江 ごめんなさい。

花江 だからさー俺、なんか悪いことしたのかな。なんの罰ゲームなんだよつ

花江 父さんや姉ちゃんみたく、夢もつてないのが悪かつたのかな。

花江 見ようと努力したじやない。

花江 でも、見れなかつた。—あの日、俺、自分の部屋で寝れなかつた。

花江 そうね。

花江 学校に行きたくなくてさ。—十七日、卒業文集出さなくちやいけなくて、

花江 将来の夢を書かなくちやいけなかつたんだけど：全く思いつかなくて：朝が

来なきやいいつて：布団に入らなきや、朝は来ないと思つて：
花江 学校に行きたくない日はいつもそう。二階にあがらない。
良彦 知つてたの？
花江 もちろん。
良彦 そつか：。知らないと思つてた。
花江 誰だと思つてるの？
良彦 花江 え？
良彦 花江 あなたが母親よ。
良彦 花江 すごいな：
良彦 花江 家族なんだから当たり前でしょ。
良彦 花江 家族か：。
良彦 花江 迷つてるの？
良彦 花江 え？
良彦 花江 本当は行きたいって思つてるんじゃない？
良彦 花江 嘘をつけない子ね。
良彦 花江 正直、嬉しかった。人に認められたのってほんとないから。—でもさ、
良彦 花江 いいのかな？
花江 良彦 なにが？
良彦 花江 だつて、俺、何かを思つて、何かを目ざしてきてたわけじやないし。それ
良彦 花江 なのに：父さんや姉ちゃんは夢があつたわけでき：さつき、姉ちゃんから：
花江 良彦 本気で言つたわけじやないわ。
良彦 花江 僕、十六年間、ずっとそう思われているんだろうなつて。—なんか、生
良彦 花江 きてるの申し訳なくて—
良彦 花江 良彦 う。—姉ちゃんや父さんみたいに、一生懸命なんだよ。
良彦 花江 「たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうに氣
良彦 花江 の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのために
良彦 花江 いつたいどうしたらいいのだろう。」
良彦 花江 『銀河鉄道の夜』。
良彦 花江 ジョバンニ？
良彦 花江 そう。小さい頃、寝る前によく読んで聞かせたから、覚えてるのね。
良彦 花江 気の毒だなんては思つてない：。
良彦 花江 一りんご、剥いてくるわね。—お腹空いたでしょ。
良彦 花江 ごめん、いらぬい。
良彦 花江 そう。—今日は疲れたでしょ。休みなさい。
花江 花江が階段をのぼつていく。

良彦 …。

良彦は炬燵に入り、うたた寝を始める。

子どもたちの声が聞こえてくる。

子どもたちの声 ケンタウルス露を降らせ！ ケンタウルス露を降らせ！ ケンタウルス露を降らせ！

子どもたちが出てくる。

子ども 1 ねえねえ！

子どもたち なになに？

子ども 今日お祭り行く？

子ども 行く行く！

子ども 2 烏瓜流し楽しみ！

子どもたち 烏瓜！ 烏瓜！

と、陽気に歩き始める。

子ども 3 ケンタウルス露を降らせ！

子どもたち ケンタウルス露を降らせ！ ケンタウルス露を降らせ！

チャイムの音が聞こえる。

すると、良彦が通っていた小学校の教室となつている。

子どもたちは炬燵で寝ている良彦を囲むように並ぶ。

先生（白鳥）が黒い山高帽をかぶり、黒い外套に身を包み入つてくる。

先生「ではみなさんは、そういうふうに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

子どもたち「はい！」「はい！」「はい！」

先生「良彦くん」

良彦 あ：はい：えと…星です：

先生「星？」

子どもたち「（笑う）」

先生「夢でも見ていたのか？」

良彦 :あれ？ カンパネルラ？

子どもたち「（笑う）」

先生『銀河鉄道の夜』かな？ 君のお父さんは童話作家だもんな。」

子ども 1

「すげえ。」

子ども 2 「童話作家だつて。」

子ども 3 「すごいねえ。」

子ども 4 「ねえ。」

子ども 5 「かっけえ。」

子どもたち 「くすくす笑う」

先生 「苦笑」授業中、寝るのはよくないな。——良彦くん、君の夢はなんですか?」

良彦 「夢?」

子ども 1 (安藤) 「ぼくはロックスターです!」

子ども 2 (小原) 「わたしはパティシエです!」

子ども 3 (菊池) 「わたしはトリマーです!」

子ども 4 (松本) 「わたしは保育士です!」

子ども 5 (原) 「ぼくはJリーガーです!」

子どもたちは良彦を見る。

良彦 :

先生 「みんな言つたぞ。ないのか?」

良彦 :

先生「夢や目標をもつと一生懸命生きられるんだぞ。君のご家族もそうだろう。
——卒業文集全く書けていいけど大丈夫か? 来週までだからな」

先生は教室から出ていく。

純也が階段から降りてきて、ソファに腰掛ける。

子ども 1 「あいつの父ちゃん、働かないで売れない本ばっかり書いてんだって」

子ども 2 「貧乏なんですよ」

良彦 「俺:」

子ども 3 「毎日同じ服だし」

子ども 4 「なんか、お姉ちゃんもおかしいんだって。私のお姉ちゃん言つてた。」

良彦 「自分の居場所がなかつた

子ども 5 「あいつの家、折鶴ばっかり! 気持ち悪い!」

子ども 1 「夢なんか適当に言えばいいのにさ」

子ども 2 「きっと童話作家になりたいんだよ」

良彦 「全部:」

子ども 3 「本気で?」

子ども 4 「寝言ばっかり言つてる家族だから」

子ども 5 「あいつ頭おかしいんだぜ」

良彦 「家族のせいだ:」

良彦の夢が現在へと移り変わる。

子どもたちは老松铸造の同僚たちへと変化する。

良彦

良彦さん、行きましょうよ本社！

安藤

ぐつちい！ 今日ウチの子高校入試なの！

小原

田口！ まだ悩んでんの？。

菊池

私、心配です：。

松本

田口君行くよね！

原

要らない：

良彦

安藤 僕ロックスター、良彦さん生松铸造のスター！

菊地

受かるように一緒にお祈りしてく！

小原

菊池 ウチのことなら心配すんなつて！

松本

松本 ご飯食べますか？

田口

田口 君なら大丈夫！

安藤

安藤 僕らここから旅立つ双子的な！

小原

小原 お願い！

菊地

菊地 あたしじや頼りないかもしんないけどさ！

松本

松本 寝てますか？

原

原 私が保証する！

良彦

良彦 家族なんて：

安藤

安藤 良彦さん！

菊池

菊池 ぐつちい！

松本

松本 田口！

原

原 田口君。

田口

田口君。 摆れてる？

良彦

良彦 ちよつ！？ 大きい！

安藤

安藤 やばいっすよ！

白鳥

白鳥 避難！

良彦以外の工場の人々は駐車場に避難する。
良彦は炬燵（工場内の部品置き場の棚の前に置いてある台）の上に上がり、虚空を見つめている。

安藤 治まつたすね：

小原 全員いる？

（携帯電話を耳に当てながら）繋がらない：

菊池 息子さん？
小原 今、試験中だから。
菊池 みんないるから大丈夫っしょ。
小原 だといいけど…。
松本 田口さんが！ 田口さんがいません！
皆え！？

原たちが工場に向かって走つていく。
全員が良彦の名前を呼びながら、工場内を探す。

（見つけて）良彦さん！
小原 ぐつちい、怪我ない！？
菊池 なんでそんなところにいるんだよ！？
小原 心配させないで！
安藤 早くこっちへ！
菊池 部品落ちてきたらどうすんだよ！
小原 摆れのショックで動けなくなつたんじやない！？
小原 安藤！
安藤 うつす！
菊池 あんたも気を付けて！ 怪我したらギター弾けなくなるよ！
安藤 そんなこと言つてらんないつすよ！

安藤は良彦を台（炬燵）から降ろそうとする。
しかし、良彦はそれを拒む。

安藤 良彦さん！
良彦 ։。
安藤 良彦さん！

安藤は良彦をゆっくりと地上へ降ろし始める。
純也 午前中の地震、でかかったな。

安藤は無事に良彦を降ろすと、小原と菊池が良彦に寄り

小原 菊池 ぐつちい！
白鳥 小原 バカ！ 心配したんだからね！
小原 雁さん！
白鳥 賴みます。

小原 一はい。 一行こう。
安藤 え？ だつて良彦さんー
菊池 いいから。

小原、安藤、菊池は被害状況の確認に向かう。

純也 一落ち込んでいるのか？ こっぴどく叱られたもん！
白鳥 どういうつもりですか？ 地震の時は作業を中断して駐車場に避難ですか？
良彦 ։。
白鳥 何もなかつたからいいじやないんです。怪我したらどうするんですか？
良彦 ։。
白鳥 （良彦の胸倉を掴み）何とか言つたらどうなんだ！？

原田（白鳥を良彦から離しながら）雁さん！ 雁さん！ 落ち着いて！
白鳥 すみません。一君がそんなにいい加減な人間だとは思わなかつた。

白鳥が足早に去つていく。

原田 田口君、どうしたの？ 雁さんが怒るのも無理はないよ。腕怪我したらどうする？ 君だけでなく周りが大変になるんだよ。雁さんは仕事に対する責任感のことを言つてゐるんだ。自覚ある？ 君はウチにとつて大事な職人なんだ。

良彦 （原を見る）։。
原田 なに？

良彦 主任が

原田 なに？

良彦 主任がそう言うのは

原田 うん。

良彦 僕が本社に：

良彦 バカ野郎！ そんなくだらないことで心配するか！！

原は立ち去ろうとするが立ち止まりー

原田 何か悩んでるの？

良彦 え？

原田 悩んでる？

良彦 本社の件ですか？

原田 違うよ。一家にも帰らないで、一大丈夫なの？ ーもし何か悩んでいることがあつたら言つて欲しい。私じや頼りにならないかも知れないとさ。

良彦 いや、別に：

原田 私はね、別にチームという氣もないし、家族を気取る氣もない。ーウチの

工場のこと。中には職場のことをチームだとか、家族だとか言う人もいるでしょう。でも、私はそう思わない。結局は赤の他人だからね。ただ、必然だと思つてゐる。君がここにいるのは何かの必然なんだ。私は、そういう縁を大事にしたいし、そういう縁で一緒になつた人間を大切だと思つてゐる。| 何もなくてよかつた。

原は立ち去つていく。

松本 田口さん：

良彦 はい？

松本 : 今日 : ひよつとして :

(松本を見る)

良彦 その :

松本 なんですか？

良彦 | また、そういう目するんですね。

松本 良彦 え？

松本 遠ざける目。

良彦 :

松本 良彦 みんな心配したんですよ：田口さん避難してこなかつたとき。

良彦 | すみませんでした。

松本 「すみませんでした」 : ですか : 関係ないですか？ 私たちじや、頼り

ないですか？ ご家族のこと、安藤君から聞いちゃいました。

良彦 :

松本 良彦 辛かつたんだろうなつて : でも、工場のみんな、田口さんのこと思つてます。独りじやないんです。家族とまではいかないかも知れないけど : でも、苦しかつたら吐き出していいじやないですか。十六年も経つてるし。

良彦 :

松本 良彦 話すと楽になるつて言うじやないですか。だから、話して――

良彦 | 呟くように) なんですか？

松本 良彦 え？

良彦 なんで話さなくちやいけないんですか？

松本 だつて :

良彦 それつて――松本さんが楽になりたいだけじゃないんですか？

松本 そんな :

良彦 | 心配したいだけなら――。

松本 そうじやない！ | ごめんなさい。 | 力になりたいんです。あなたの力になりたいんです。 | ずっと苦しそうだから : 。

良彦 苦しそう : ?

松本 はい : 。

良彦 決めるのは松本さんじやないです。

松本 良彦 |。
松本 良彦 もういいですか？ ラインに戻らなくちゃいけなので。
松本 良彦 |。

良彦はリュックから、筆記用具を持って、炬燵に座る。

松本は佇んでいる。
良彦は折紙に何かを書き始める。

純也 あの子、あのあとしばらく立っていたぞ。—お前はホントだめだな。いいか、ああいう時は—

松本 話すと楽になるって言うじやないですか。だから、話して—

純也 ここ！ ここで、「それじゃ、今晚飲みながら聞いてくれる？」って言えば—

松本 あ：私で：私なんかでよければ。

純也 となる！ いや、むしろ—「あれ？ 松本さんって独り暮らし？」と聞けば—

松本 あ：はい。：晩御飯作りましょうか？ 美味しいかわからないけど。
—今日は六時にはあがれます！

松本は事務室へとかけていく。

純也 なあ！

良彦 （黙々と折り紙に書き込んでいる）

純也 すまん、ふざけ過ぎた。—怒つてんのか？

良彦 怒つてなんかないよ。

純也 そうか？

良彦 うん。

純也 しかし、良い人たちだな。—温かいというか、なんというか。—良い人

たちと出会ったなあ！

良彦 —何書いてるんだ？

仕事のこと。

良彦 そうだね。

良彦 : (二枚目を取る)

純也 良彦君、俺、仕事したことないからわかんないんだけど、仕事のことつ

て折り紙に書いて良いもんなの？

良彦 本当はダメだね。

純也 そうだよな。

良彦 うん。
純也 何を書いてるんだ?
良彦 ん?
純也 書置き?
良彦 僕いなくなつても、ライン回るよう。一しばらくは涼子さんが製造と
品管を掛け持ちするだろうから、あまり負担にならないよう。一あと、試
作品の強度のこと、雁さんに。
純也 良彦: お前: ついに決心がついたのか。
良彦 一そうだね。一出て行く。一ここから出て行く。
純也 うん! みんなの恩に報いるためにもな!
良彦 . . .
純也 一? そして?
良彦 さあ。
純也 さあつて、その次だよ!
良彦 一分からない。
純也 愛知だろ?
良彦 一行かないよ。
純也 どうして?
良彦 一行つても仕方がないから。
純也 じや、どうして出て行く。
良彦 一居ても仕方がないから。
純也 仕方がないって: ここはお前の居場所だろ。一みんながお前のことを
思つているのが分かつたる。
良彦 :思つてない。
純也 なに?
良彦 |人と関わろうなんて思つてないし、居場所が欲しいなんて思つたこと
ないよ。俺は独りでいたいだけなんだ。
純也 本気でそう思つてるのか?
良彦 ああ。
純也 どうして、それを書いている。
良彦 |矛盾してる。
純也 何が?
良彦 純也 どうして、それを書いている。
良彦 純也 出て行くから。
良彦 純也 どうしてだ? 他人と関わりたくないんだよな?
純也 だつたら、勝手にい
なくなればいいだろ? どうして、「負担にならないように」つて書置きを残
す?
良彦 何に意地をはつてるんだ? 一お前はこここの工場の人たちのこと大切だ
す?:

と思つてゐるんだろ？

良彦 | 思つてないよ。

純也 |

良彦 | 思つてないって言つてるだろ！

純也 |

良彦 | だから：ひどいこと言つたり、相槌も適当にしかうたなかつたり…、嫌

いなんだよ。おせつかいばっかりで。

純也 | 良彦、「好き」の反対の言葉、知つてるか？「嫌い」「憎い」…違う。「無視」：「無関心」だ。自分の中に相手がいないからな。でも、お前は違う。本当は好きなんだよ。大切なんだ。—嫌いを装つてるだけだから、みんなお前が心配なんだ。

良彦 | 愛知に行こう。

良彦 |

純也 | それじや、ここに残つてがんばるのか？

良彦 |

純也 | —良彦。

良彦 |

あんなにあつさり崩れたのに！ なんでだよ！ なんでだよ！

純也 | お前：やつぱり：

良彦 | 死ねるつて思つた。—やつと死ねるつて：

純也 | 何言つてるんだ。—お前：

純也はリュックのポケットから、作文を取り出し—

—読んでみろ。

純也 | やだよ。

純也 | いいから。

良彦 | いいやだ。

純也 | いいから！（強く作文を良彦に押し付ける）

良彦 | 読め！

良彦 | 「—阪神大震災から、もう五年が経ちました。けれども、あの日のことをはつきりと覚えていいます。夢を追い続けた父と姉、それを支えていた母を一度に失つた日を…。僕はその日、台所で寝ていました。五時四十六分。目を覚ましたのが先なのか揺れ始めたのが先なのかよく覚えていません。耳に入つて来たのは「ゴー」と響く地面の音。次の瞬間、ぼくは荒れ狂つた波の中に入るようでした。僕は何かを叫んでいました。でもその叫び声は螢光灯やグラス、食器が「バリバリ」と、強く地面に打ち付けられる音にかかり消されていました。次の瞬間、僕の目に入ったのは、家の窓や障子が—ま

るで紙でできているみたいに脆く、そして容易く崩れていく光景でした：そして、姉が寝ていた二階が：（読みない）

純也：すまん：

良彦：：

純也：最後のところだけでいいから。

良彦：「僕は家族の分まで生きます」：

純也：な！（良彦から作文を取り上げ）ここにしつかりと書いている！お前は俺たちの分まで生きるんだよ。

良彦：：

純也：お前がそう決めたんだ。一あの日から十六年も経つた。いい加減に前を向いて！

良彦：十六年も経つたってなんだよ！

純也：良彦：

良彦：俺には昨日のことなんだ！――！？

良彦の顔に懐中電灯の光があたる。

白鳥 やっぱり居ましたか。

白鳥が休憩室へと入ってくる。
純也は作文を炬燵の上に置き、ソファーに腰かける。

良彦：はい。

白鳥 電気つけますよ。

良彦：はい。

室内の電気がつく。

白鳥（炬燵の上の用紙に気が付き）これ：

良彦：あ：

白鳥は作文を取り、読む。

良彦：：

白鳥は読み終わる。

白鳥：。

白鳥は作文を丁寧に畳み、炬燵の上に置く。

そして、肩にかけていたスープジャーを開け—

白鳥 飲みませんか？

良彦 え？

白鳥 家内特製のオニオンスープです。—いい歳して、なに気取つてんだつて感じですがね—これが意外といけるんです。—腹減つたでしよう。

良彦 ∶はい：

白鳥 座つて。

良彦 はい：

良彦は炬燵に座る。

白鳥はスープジャーを良彦の前に置く。

良彦はゆっくりと一口飲む。

また一口。

白鳥 手前味噌ですが、美味しいでしよう。—甘みとコクがあつてね。—私は、これにご飯を入れるんです。パンじやなくてね。—雑炊みたいで、美味しい。一家内にはリゾットだつて言い直されるんだけどね（笑う）

良彦はスープジャーから口を離し、黙る。

白鳥 口に合いませんでしたか？

良彦 いえ、美味しいです。

白鳥 よかつた。

良彦 ∶。

白鳥 一すみませんでした。

（白鳥を見る）

良彦 思わずカツとなつて…年甲斐もなく…ダメですね。

良彦 こちらこそ…すみませんでした…

静寂

白鳥 冷めない私に。夜はまだ冷える。風邪、引かないように暖かくして、ゆつくり休んで。—明日、また。

良彦 明日…また…

白鳥は休憩室から出て行こうとする

良彦 雁さん。

白鳥 ん？

良彦 炭素量だと思うんです。——強度あげるには、炭素量を変えるしかないと思ひます。

白鳥 炭素量か：なるほど。どれぐらいですか？

良彦 それは実際に明日：（言いかけて気づき）

白鳥 田口君？

良彦 純也

良彦 お前には明日がある

良彦 純也 明日を考えることができる

良彦 純也 それだけで十分じやないか？

良彦 純也 俺：もう、来ません：

白鳥 工場に？

良彦 はい。

白鳥 どうして？

良彦 田口君。

良彦 俺：殺したんです…。俺：家族を殺したんです…

白鳥 美鈴が階段からおりてきて、階段に腰掛ける。

白鳥 君の家族は—

良彦 十六年前の地震で…

白鳥 だつたら—

良彦 僕：家族なんていらぬって：父さんも姉ちゃんも：母さんもいなくなればいいのにつて：死んでしまえばいいのにつて：思つてました：そしたら本当に：

白鳥 君のせいじやない。

良彦 七十二時間の壁：あの地震のあとに知りました——俺、あの時怖くなつたんです：目の前の変わり果てた家を見て：周りでは助けを呼ぶ声、悲鳴：怒鳴り声：突然目覚ましのベルが聞こえてきた——姉ちゃんの目覚まし時計です：おかしいのは家族の誰も止めに来ないんです。いつもだつたら、誰かが止めるのに。——その時、父さんも母さんも、姉ちゃんも瓦礫の下にいるんだつて気づきました：俺、無我夢中で瓦礫の中を探しました。そしたら：目覚まし時計だけ出てきたんです：俺：鳴り続ける目覚まし時計を持つた状態で近くの人に助けられました…。——俺が思わなかつたら：ひよつとしたら…。俺がもつと：もつと必死になつて探せば：死ななかつたんじやないかつて…：

美鈴 ばうか！ 探しても探さなくてよかつた。
純也 お前に見られなくてよかつた。

良彦 僕：俺だけ生きてて申し訳なくて：でも、家族の分まで生きなきやつて思つて：でもどうすればいいか分からなくて：何度も消えたいつて：でも、消えたら家族ががんばって生きてきたことも一緒に消えてしまいそうで：白鳥 長い間、がんばってきたんですね。

良彦 ーがんばってなんかいません：

白鳥 私はそう思います。

良彦 ։。

白鳥 どんな言葉もきっと月並みでしかないし、君の苦しみには及ばないかもしれないけれども一生きててくれてよかつた。

良彦 ։生きてて良かつたんでしょうか：

白鳥 私はそう思います。ー生きる意味なんか考えなくていい。生きてくれていることだけで、私は嬉しいんです。ーありがとうございます。ー腹減ったでしょ。ー車の中にリンゴがありました。持つて来ましょう。

白鳥が休憩室を出て行く。

純也 良い人に出会ったな。

美鈴 ホント。

花江 リンゴ剥きましたよ。

花江がリンゴを持って出てくる。

純也 腹減ったな。

花江 座りましよう。

純也・美鈴・花江が炬燵に入る。

純也・美鈴・花江 いただきます。

良彦 ։。

純也 良彦、食べろ。

良彦 うん：

良彦が炬燵に入り、リンゴを食べる。
家族はそれを見て、一緒に食べ始める。

花江 美味しい？

良彦 うん：美味しい：

花江 そう。

良彦 父さん、母さん、姉ちゃん。—ごめん。—俺：今日：本当は怖かった。
もしも：あのまま押しつぶされるかもって思うと…。死にたいって思つて
たのに、死ぬつて思うと怖かつた：
純也 なんだ！ 今更気づいたのか？
美鈴 ダメ彦はやつぱりダメ彦だ。
花江 お姉ちゃん。
美鈴 だつて、そうでしょ。
良彦 あのさ：俺：生きてていいかな？ —したいことつて何か分からな
いけど：父さんたちみたいにかつこよく生きられないけど：何ができるのかわか
らないけど：生きてていいかな：
花江 はい。
良彦 うん。
美鈴 ありがとうございます：
純也 あく！ 長かつた！
純也 やつといけるな。
良彦 うん。
美鈴 一どこに？
「銀河ステーション」「銀河ステーション」と周りから声が響いてい来る。
美鈴と花江は立ち上がり、銀河ステーションへと向かう。
良彦 母さん！ 姉ちゃん！
純也 あ！ かつこよくはない。
良彦 え？
純也 寝言みたいな夢を追つて、何にもならんかつた。
良彦 そんなことない！ そんなことないよ！ 俺はかつこいいと思う！
純也 あたしたち、寝言家族だから。
純也 恥ずかしい思いさせたな。面白ない。
良彦 そうか。—お前がそう思うならそれでいい。—ありがとう。
良彦 ありがとうって：こっちのセリフだよ。—ありがとう！
花江 あなた。
純也 おう、そうだった。—これ。
純也 俺らが俺らの願いが叶うことを探つて折つた。
花江 折鶴つて人のためじやなく自分のために折るものだから。
良彦 願い？
良彦 お前がお前らしく生きられますように。

純也はズボンの脇ポケットから折鶴を一つ出し、良彦に渡す。

良彦 美鈴 花江 よし、行くか
うん。
純也 チケット持つ
良彦 ずっと持つて
良彦 ー。
純也 そんな顔する
良彦 ごめん。
謝るな。
ごめーうん。

良彦：何これ？
花江：おかしいわね。
純也：おかしいか？
美鈴：いいんじやない。
良彦：うん。

「銀河ステーション」「銀河ステーション」と周りから声が響いてい来る。
良彦から離れる家族。

美鈴 あたしも！
美鈴が純也の背中から良彦を抱きしめる。
静寂。

花江が良彦を優しく抱きしめる。
純也 僕も！

良彦 父さん……
美鈴 （渡しながら）あたしも。——変な女にひつかからないこと。
純也 美鈴……
美鈴 冗談！——まつすぐ前を見られますように。
良彦 姉ちゃん……
花江 （渡しながら）はい。——良彦が病気になりませんように。——怪我しませんように。——元気に過ごせますように。
良彦 母さん……
花江 良彦……。

汽笛。

銀河鉄道に乗車する死者たちが休憩室を行き来し始める。
その格好は黒い山高帽に黒い外套。

純也 混んできたな。

良彦 父さん、母さん、姉ちゃん：いつてらっしやい。
純也 いってきます。

美鈴 早くしないと席取れないよ。

純也 わかつたわかつた。

美鈴と純也が銀河鉄道に乗り込んでいく。

花江 大丈夫？

良彦 一大丈夫。

花江 そう。

良彦 ありがとう。

花江 良彦—ありがとう。

花江は銀河鉄道に乗り込んでいく。
汽笛の音。

良彦は銀河鉄道を見送る。

良彦 ありがとう：本当にありがとう…

時間は過ぎ：三月十一日。

安藤の旅立ちの日。

休憩室ではささやかな送別会が開かれている。

良彦 いつてらっしやい。

工場の面々が拍手をする。

安藤 あざつす！ ホント、あざつす！

小原 ぐつちいこと田口良彦君からの感謝の言葉でした。—ちよつと、ぐつち
い、よかつた。—よかつた。原君より良かつた。

原 何それ！

良彦 いえ：

原 私もよかつたよね？

安藤 よかつたつす。

原 どつち良かつた？

菊池 安藤 え：
菊池 菊池 え？ そういうとこ。
原 菊池 安藤 いいからいいから。 一進めて。
小原 安藤 では、安藤君から。
安藤 安藤 うすーはい。えっと、今日は本当にあざーありがとうございます。ぼく、
安藤海翔は今日、三月十一日をもつて生松铸造を卒業します。
菊池 菊池 どつかで聞いたことあるフレーズ。
小原 小原 ちやちやいれない。
安藤 安藤 へへ。いや、本当はこつそりいなくなろうかつて思っていたんです。な
んか、やつぱり淋しいから。四時の新幹線だから、みなさん仕事している間
に。そしたら、良彦さんに見つかって：良彦さん、みなさん仕事している間
…。でも、やつぱり、みなさんに最後あいさつできて良かったです。—あの、
自分、どこまでできるか分からなければ、がんばってこようと思いつます。—
ここで学んだこと生かして、精一杯がんばってこようと思いつます。—今まで、
本当にありがとうございました！

みな、大きな拍手。

小原 安藤！ ビッグにならなくとも応援するから！
安藤 ！ありがとうございます。
菊池 安藤 新幹線大丈夫なの？
松本 安藤 まだ一時間以上ありますし。
菊池 松本 一昨日じやなくてよかったですね。
原 小原 九日の地震な。—久しぶりに揺れたもんない。
小原 はいはい。続けるよ。—では、ささやかではありますが、安藤君へ贈り
物です。—雁さん。
白鳥 白鳥 はい。—安藤君、知っているかもしねないけど：これ。

白鳥は千羽鶴を出す。
安藤は皆に向かつて一礼。

安藤 白鳥は千羽鶴を出す。

地面が揺れ始める。

松本 安藤 小原 菊池
二〇一一年三月十一日十四時四十六分十八秒。東日本大震災発生。
また地震ですか？
この前より弱いんーん？ 一ちょっと長くない？
これ、やばくない。

地震が大きく横揺れを始める。

白鳥、安藤、原は九日の良彦を思い出しー

白鳥 田口一

原 田口一

安藤 良彦ー

良彦 炬燵の下に！

安藤 え？

皆、良彦を見る。

良彦 ー炬燵の下に隠れて！

皆 (ポカーンと良彦を見ている)

良彦 早く！

安藤 はい！

小原 全員は無理！

原 女性だけでも！

安藤 俺たちは！？

白鳥 体を低くして、頭を守る！

良彦 早く！

小原、菊池は炬燵の中へ隠れる。原たちは身を低くして、頭を守る。

良彦 松本さん！
松本 動けません：

良彦は松本の傍に倒れないように気を付けながら向かい、松本の腕を取る。

松本 (良彦の腕にしがみ付きながら) 惨いです：

良彦 俺も怖いです：

松本 |。
良彦 大丈夫。

良彦は松本を体に寄せ、松本の頭を守るように抱きしめ、態勢を低くする。

搖れが大きくなる。

そして、電気が消える。

白鳥 いたいた。 — 菊池さん。
菊池 はい？
白鳥 ちよつと強度が怪しいのがあります。
菊池 今ですか？
白鳥 できれば…
菊池 はい。
良彦 お疲れ様です。
菊池 — 行ってきます。

菊池と白鳥は休憩室を出て行く。

炬燵の周りには良彦・菊池・松本がいる。菊池と松本は昼ご飯を食べ終えたようで、思い思い休憩している。良彦は鶴を折っている。

階段には姉、美鈴が腰かけている。

ソファーには父、純也と母、花江が腰かけている。

すると、廊下から声が聞こえてくる。

小原涼子ちゃん！ 雁さん！ ジャーン！
菊池ちよつと！ どうしたの？

安藤あ、ちよつと帰つて来たんで。

白鳥ごゆつくり。

安藤あざつす。

菊池夜空いてる？

安藤はい。

菊池飲みに行くよ。

安藤——主任の愚痴を聞いてもらうからね！

その様子を聞いていた松本は口を押えて笑う。
ばつが悪そうな良彦。

小原が休憩室に入つてくる。

小原ぐっちょり！ ワカちゃん！ お客さん！
安藤お久しぶりっす。

私服姿の安藤が休憩室に入つてくる。

松本聞こえてたよ。
安藤あれ、また折つてるんすか？
良彦え？ 一あ、うん。

安藤おう。

松本お元気そうで。

安藤良彦おう。

小原集中力高めましょ的な？

良彦そうだな。

小原まだ千羽鶴持つてる？

安藤おかげさまで、ちよこつとずつ。

小原ホント？ C D屋さんに行つても、みないよ。

安藤そこまでは売れてないっす。

松本今日はどうしたの？

安藤この前の日曜、ちようど一年だつたじゃないですか。——沿岸の方でチャ

リティーライブあつて。

歌つたの？

安藤——手伝いを。——復興まだまだつて感じすね。

小原うだな。

安藤ぐつちい、時々、沿岸に行つてるんだつて。

小原そなんすか？

良彦 まあ—できること限られてるけどさ。

安藤 そっすか。 —あ！ 主任になつたつて聞いたつすよ！ スバルタラし

いじやないすか！

そんなことないよ。

安藤 俺ももう少しいたらよかつたつす。

良彦 夢追うんだろ？

安藤 うす。

小原 はい！ 時間！

安藤 ええ？

小原 いいろんな人に顔見せに行くんだから。分刻み！ 行くよ！

小原が安藤を引っ張る—

安藤 今日、飲みましようよ。—皆で！

良彦 —分かった。

安藤と小原は休憩室を出て行く。
部屋に残る良彦と松本。

松本 がんばってるんですね。

良彦 そうですね。

松本 :

良彦 :

松本 私、さきに行つてます。

松本は立ち上がる。

良彦 あの。 松本 はい？

良彦 も立ち上がり、自分のリュックのところへ行き—

松本 はあ。 松本 はあ。 —一年前はそれどころじやなかつたですしお返しです。

良彦 今年もいたきましたし：

良彦 大したものじやないですが—（リュックから小さいプレゼントを出し）

松本 え？ 松本 はい。

松本 あ……今日……
良彦 はい。
松本 | ありがとうございます。
良彦 いえ……こちらこそ。
そこに原が入つてくる。
原 あ、いた！
松本 工場長。
原 午後、銀行来るでしょ。——もう一度帳簿確認したいんだけど。
松本 はい。

原が休憩室を出て行く。
松本 | 行つてきます。
良彦 行つてらっしゃい。
松本 | はい。

松本も休憩室を出て行く。
良彦もリュックを背負い、休憩室を出ていこうとするが、炬燵の上の折鶴が目に入る。
炬燵に向かい、しゃがみ、折鶴を開く。

良彦 父さん、母さん、姉ちゃん、行つてきます。
純也・花江・美鈴 行つてらっしゃい！

良彦は三人の声が聞こえたようを感じた。

良彦 あれから十七年が経つた。まだなのか……もうなのか……俺には分からぬ。
それでも、大切な家族がいたことは忘れない。——寝言のよう夢を追い続けた家族を。——夢を叶えるため、必死に努力した姉。

美鈴は階段をのぼっていく。

良彦 夢を叶えるため、懸命に生きた父。
純也は部屋を出て行く。
良彦 二人を支えた母。

花江は部屋を出て行く。

良彦 僕ーしたいことって何か分からないけどー父さんたちみたいにかつこよ
く生きられないけどー何ができるのかわからないけどーでも、がんばるよ。
ー行ってきます。

良彦は休憩室を出て行く。
机の上には折鶴が残っている。

【終】